

日蓮大聖人御書全集

ひやくろつかしろう

百六箇抄

新版
2198
ゝ
2218

ひやくろつかしよう

百六箇抄

ぐとうほんしゆ　しやうほう　じつぎ　ほんじやくしやうれつ　しやうでん

具騰本種・正法の実義・本迹勝劣の正伝、

ほんいんみよう　きやうしゆ　ほんもん　だいしにちれん　つつし　けつちやう

本因妙の教主・本門の大師日蓮、謹んでこれを結要す。

まんねんくごしやびよう　でしにつこう　じゆよ　うんぬん　だつ

万年救護写瓶の弟子日興にこれを授与す云々。脱

しゆ　がつ　いっぴやくろつか　あ

と種と合して一百六箇これ在り。

りやうぜんじやうど　たほうとうちゆう　くおんじつじやう　むじやうかくおう　じきじゆ

靈山浄土・多宝塔中・久遠実成・無上覚王・直授

そうじやうほんじやくしやうれつ　くけつそうでんふ　くおんみやうじ　このかたほんいんほんが

相承本迹勝劣の口決相伝譜、久遠名字より已来本因本果

しゆ　ほんじじじゆゆうほうしん　すいじやく　じやうぎやうぼさつ　さいたん　ほんもん

の主・本地自受用報身の垂迹・上行菩薩の再誕・本門の

だいしにちれんせんよう

大師日蓮詮要す。

ほんじゃく

ほんじゃく

本迹

本迹

り いちねんさんぜんいつしんさんがん ほんじゃく

理の一念三千一心三観の本迹

さんぜしよぶつ しゅつせじようどう だつちやくじゆりよう ぎり さんぜん

三世諸仏の出世成道の脱益寿量の義理の三千は、

しゃかしよぶつ ぶつしん みようほうれんげきよう りかん いっしん うんざい

釈迦諸仏の仏心と妙法蓮華経の理観の一心とに蘊在せる

り

理なり。

ほんじゃく

きよう ほんじゃく つね

本迹

経の本迹は常のごとし

だいっうこんにち ほつけ ほんじゃく

大通今日の法華の本迹

くおんみようじほんいんみよう ほん

ちゆうげん こんにち げしゆ

久遠名字本因妙を本として、中間・今日、下種す

ゆえ くじよう ほん ちゆうげん こんにち ほんじゃく

るが故に、久成を本となし、中間・今日の本迹をとものに迹

しやく

とするものなり。

おうぶついちだい ほんじやく

応仏一代の本迹

くおんげしゆ りようぜんとくだつ みようほうち ぐ しゆじよう り

久遠下種・靈山得脱・妙法値遇の衆生を利せんが

むさ さんじん じゃつこうじようど さんげん さんち ぐかい

ために、無作の三身、寂光浄土より三眼・三智もて九界を

ちけん しやく た ごん ほどこ のち と みようきよう ゆえ こんにち

知見し、迹を垂れ権を施す後に説く妙経の故に、今日の

ほんじやくとも しやく

本迹共に迹とこれを得るものなり。

しやくもんい りえん いっち ほんじやく

迹門為理円の一致の本迹

しようはくふうは まんしいういちによ しよほうじつそう り うえ かんじん

松柏風波・万声一如・諸法実相の理の上の観心は、

おうぶつ しろ ひ ゆえ ほんじやく わ

応仏の域を引かえたる故に、本迹とは別くれどもただ理の

うえ ほつそう

ほんじやくりかん

みようほう

あらわ

しゃつけ

ふぞくな

上の法相なれば、本迹理観の妙法と顕す。迹化は付嘱無

ゆえ

ひろ

きが故にこれを弘めず。

はは ぎ

ち ぎ

母の義なり、地の義なり

しんぼうそくしんじようぶつ

ほんじやく

心法即身成仏の本迹

ちゆうげん

こんにち

しゃくもん

しんぼう

じようぶつ

けごん

中間・今日も迹門は心法の成仏なれば、華嚴・

あごん

ほうどう

はんにや

ほつけ

あんらくぎようほん

いた

りんり

どう

阿含・方等・般若・法華の安樂行品に至るまで円理に同ず

ゆえ

しゃく

おと

ほん

すぐ

るが故に、迹は劣り本は勝るものなり。

によ ぎ

女の義なり

しんぼうみようほうれんげきよう

ほんじやく

心法妙法蓮華経の本迹

さんけい

いつさいしよほう

もと

このかた

ふしようふめつ

山家云わく

「一切諸法は本より已来、不生不滅にし

しょうそうぎようねん

しゃか くち と

しんじ

ことば

ぜつ

うんぬん

て性相凝然たり。釈迦は口を閉じ、身子は言を絶す」云々。

ほうべんぼん

りぐ

じっかいごぐ

と

ほんもん

いた

けんぼんり

方便品には理具の十界互具を説く。

本門に至つて顕本理の

うえ ほっそう

くおん

たい

み

じっそう

くおん

上の法相なれば、久遠に対してこれを見るに、実相は久遠

すいじやく

ほんもん

ゆえ

しきほう

垂迹の本門なるが故に、色法にあらざるなり。

じゅういんしか

ちゅうげんこんにち

ほんじやく

従因至果の中間今日の本迹

ぞうほう

しゆぎよう

てんだい

でんぎようぐつう

ほんじやく

ちゅうげん

こんにち

像法の修行、天台・伝教弘通の本迹は、中間・今日

しゃくもん

いん

ほんもん

しゆぎよう

か

の迹門を因となし、本門の修行を果とするなり。

ほんが

みようほうれんげきよう

ほんじやく

本果の妙法蓮華経の本迹

こんにち

ほんが

じゅういんしか

ほん

ほんが

おと

今日の本果は従因至果なれば、本の本果には劣るな

じゅうりよう

だつちやく

ざいせいちだん

いっぽんにはん

しやりほつとう

しやうもん

り。寿量の脱益、在世一段の一品二半は、舍利弗等の声聞

かんじん

われ

きやうそう

こころ

しやく

のための観心なり、我らがためには教相なり。情は、迹

おと

ほん

すぐ

めつごぞうほう

そうじ

かんぎよう

げりよう

は劣り本は勝るるなり。また滅後像法の相似・観行の解了

ぎやうやく

なんがく

てんだい

でんぎよう

しゆぎよう

の行益も、もってかくのごとし。南岳・天台・伝教の修行

まつぽう

い

しゆぎよう

たいごんきやくりやく

ぎよう

な

のごとく末法に入つて修行せば、帶権隔歴の行と成つ

われ

こけ

ぎよう

な

にちれん

いっこう

て、我らがためには虚戯の行と成るべきなり。日蓮は一向

ほん

てんだい

いっこう

しやく

よ

よ

と

に本、天台は一向に迹なり。能く能くこれを問うべし。

しよ

く

い

にぜん

みなこ

じつ

疏の九に云わく「爾前は皆虚にして実ならず。

しやくもん いちこいちじつ ほんもん みなじつ こ うんぬん にぜん

迹門は一虚一実、本門は皆実にして虚ならず」云々。爾前

にしゆ とが いち ぎようふ そんな ゆえ

二種の失のこと、「一には、『行布を存するが故に、なお

ごん かい しやくもん り いちねんさんぜん かく

まだ権を開せず』とて、迹門の理の一念三千を隠せり。二

しじよう い ゆえ しやく ひら

には、『始成を言うが故に、なおいまだ迹を發かず』とて、

ほんもん くおん かく しやくもんほうべんぼん いちねんさんぜん にじようさぶつ

本門の久遠を隠せり。迹門方便品は一念三千・二乗作仏を

と にぜんにしゆ とがひと のが ほんもん いた しやくもん

説いて、爾前二種の失一つを脱れたり。本門に至つて迹門

じっかい いんが う やぶ すなわ ほんいんほんが ほうもん

の十界の因果を打ち破る。これ即ち本因本果の法門なり。

まこと いちねんさんぜん あらわ にじようさぶつ さだ うんぬん せけん

実の一念三千も顕れず、二乗作仏も定まらず」云々。「世間

つみ あくどう お もの そうじよう ど ぶつぼう

の罪によつて惡道に墮つる者は爪上の土、仏法によつて

あくどう お もの じつぽう ど

悪道に墮つる者は十方の土のごとし。故は、信心の根本は

ほんしようしやくれつ よ しんじん しよう

本勝迹劣なり。余の信心は枝葉なり。

よぎよう わた ほけきよう ほんじやく

余行に渡る法華經の本迹

いちだいはちまん しょう ほんいんみよう げしゆ う と

一代八万の諸法は、本因妙の下種を受けて説くところ

おし ゆえ いちぶはつかんないしいちだいごじ しだい ていとう

ろの教えなるが故に、一部八卷乃至一代五時の次第・梯蹬は、

みようじ みようほう げしゆ じゆくだつ ほんじやく

名字の妙法を下種して熟脱せし本迹なり。

ざいせ かんじん ほけきよう ほんじやく

在世の觀心の法華經の本迹

いっぽんにはん ざいせいちだん かんじん てんだい ほんもん

一品二半は、在世一段の觀心なり、天台の本門なり。

にちれん きようそうしやくもん うんぬん

日蓮がためには教相迹門なり云々。

だつちやく みようほう きようしゅ ほんじやく
脱益の妙法の教主の本迹

しよせつ しようほう ほんもん のうせつ きようしゅしやくそん しゃくもん
所説の正法は本門なり、能説の教主釈尊は迹門
ほうおの ひろ にんぼう ひろ ゆえ にんぼう

なり。 法自ずから弘まらず、人法を弘むるが故に、人法とも
たつと
に尊し。

だつちやく こんしさんがい きようしゅ ほんじやく
脱益の今此三界の教主の本迹

てんじようてんげゆいがどくそん しゃくしんもん みつびようじゆりようほん
「天上天下唯我独尊」は迹身門、密表寿量品の

こんしさんがい すなわ ほんじんもん
「今此三界」は即ち本身門なり。

だつちやく ぞうほう じこく ぐきよう ほんじやく
脱益の像法の時剋の弘経の本迹

てんだい ほんじやく にちれん しゃくもん じこく
天台の本迹はともに日蓮が迹門なり。時剋また

てんち ふどう

あ

天地の不同これ在り。

だつちやく しやくもん しゆぎよう ほんじやく

脱益の迹門の修行の本迹

しょうほういつせんねん しゆぎよう とく ぞうほういちにち とく すぐ

正法一千年の修行の徳より像法一日の徳は勝れた

るなるべし。

だつちやく しやくもん じ げぶつじよう しゆぎよう ほんじやく

脱益の迹門の自解仏乗の修行の本迹

じゆくやく しやく だつちやく ほん

熟益は迹、脱益は本なり。これに就いてこれを

しゆい

思惟すべし。

だつ ごだいそん ほんじやく

脱の五大尊の本迹

たじゆゆうおうぶつ ほん ふげん もんじゆ みろく やくおう しやく

他受用応仏は本、普賢・文殊・弥勒・薬王は迹なり。

ほんじゃくてんだい

本迹天台

だつ しんぞくにたい ほんじゃく

脱の真俗二諦の本迹

てんだいだいしぐつう ほんじゃく

天台大師弘通の本迹は、前の十四品は迹門に約し、

のち じゅうしほん ほんもん やく うんぬん

後の十四品は本門に約す云々。「この法は法位に住して、

せけん そう じょうじゅう もん

世間の相は常住なり」文。

さき じゅうしほん るつうぶん ほんじゃく

前の十四品ことごとく流通分の本迹

によらい ないしやう じよほん めつごしやうぞうまつ

如来の内証は、序品より滅後正像末のためなり。薬

おうぼさつ ぞうほう しゆ てんだい みぴよう ほっしほん つた

王菩薩は像法の主、天台これなり。密表の法師品に云わく

こんしさんがい もん

「今此三界」文。

だつちやく　りかんいつち　ほんじやく
脱益の理観一致の本迹

ほんじやくこと

ふしぎいち

い

「本迹殊なりといえども、不思議一なり」と云うは、

こんにちないしちゆうげん

ほんじやく

ほんじやく

ふんべつ

ほんいんみよう

今日乃至中間の本迹は、本迹と分別すれども本因妙を

げしゆ

と

ほんじやく

しやく

ほん

ほん

下種として説くところの本迹なれば、迹の本は本にあら

うんぬん

ず云々。

だつちやく

かいたい

ほんじやく

脱益の戒体の本迹

にぜん

しやくもん

じゆくやく

かいたい

しやく

だつちやく

かいたい

爾前・迹門の熟益の戒体を迹とし、脱益の戒体を

ほん

しやくもん

かい

にぜん

だいしよう

かい

すぐ

ほんもん

本とするなり。迹門の戒は爾前の大小の戒に勝れ、本門の

かい　にぜん

しやくもん

かい

すぐ

戒は爾前・迹門の戒に勝るるなり。

だつ　しゃつけ　しちめん　ほんじやく
脱の迹化の七面の本迹

ぞうほう　りかん　ほん　もち
像法には理観を本と用いるなり。故に、天台は迹を

ほん　ほん　しゃく　ぎよう
本となし本を迹と行ずるなり。

だつ　しゃつけ　ほんぞん　ほんじやく
脱の迹化の本尊の本迹

いちぶ　ほんぞん　さだ　さき　じゅうしほん　しゃく　のち
一部を本尊と定むるに、前の十四品は迹、後の

じゅうしほん　ほん　うんぬん　いちぶはつかん　うんぬん
十四品は本なり云々。これは一部八卷なり云々。

だつちやく　しゅごしん　ほんじやく
脱益の守護神の本迹

しゅご　ほつけ　ほん　しゅばん　たてまつ
守護するところの法華は本、守番し奉るところの

かみとう　ほんいんみよう　かげ　ばんすい　う　じじよう
神等は迹なり。本因妙の影を万水に浮かべたることは治定

なり云々。
うんぬん

だつちやく さんのう ほんじやく

脱益の山王の本迹

くおん ちゆうげん う

ほつけ ほん

まも

久遠・中間に受くるところの法華は本、それより守

きた

すいじやく

げしゆ

ほんいんみよう

うんぬん

り来るところは垂迹なり。下種は本因妙なり云々。

だつしやく じゆうらせつによ ほんじやく

脱迹の十羅刹女の本迹

くおん ちゆうげん こんにち

りじ

ほん

ちゆうげん

だいつう

こんにち

久遠・中間・今日の理事は本、中間・大通・今日に

しゆつせ

みようしゆ

すいじやく

げしゆ

さき

出世して冥守するところは垂迹なり。下種は前のごとし

うんぬん

云々。

だつしやく

ふぞく

ほんじやく

脱迹の付嘱の本迹

だつちやく

しゃつけふぞく

ちゅうげん

だいづう

ほん

こんにち

脱益の迹化付嘱は、中間・大通を本とし、今日の

しよじゅう

お

しゃく

う

しやうほう

ほん

たも

かた

初住の終わりを迹とするなり。受くる正法は本、持つ方

しゃく

は迹なり。

だつしゃく

かいえ

ほんじやく

脱迹の開会の本迹

だいづう

はじ

かい

い

こんにち

しよじゅう

お

え

大通の初めを開と云い、今日の初住の終わりを会と

い

ほん

だいづう

しゃく

しよじゅう

はじ

あらわ

かい

云うなり。本は大通、迹は初住なり。「初めに顕すを開と

い

お

がつ

え

い

うんぬん

あんい

り

うえ

あん

云い、終わりに合するを会と云う」云々。案位も理の上の案

い

位なり。

だつちやく

じようぶつ

ほんじやく

脱益の成仏の本迹

じゆりようほん　ほん　おうぶつ　しゃく　む　さ　さんじん　じやつこうど
寿量品は本、応仏は迹なり。無作の三身、寂光土に

じゆう　さんげん　さんち　くかい　ちけん　うんぬん
住して、三眼・三智もて九界を知見す云々。

だつしやく　さんしゆ　きようそう　ほんじやく
脱迹の三種の教相の本迹

にしゆ　しゃく　かいえな　いつしゆ　ほんぬ　かいえ
二種は迹にして開会無し、一種は本有の開会なり。

いつしゆ　かいけん　にしゆ　かいえ　しよじゆう　けんぞく　きようそう
一種は開顕し、二種は開会せず、所従・眷属の教相なり

うんぬん
云々。

だつ　ごみ　しよじゆう　ほんじやく
脱の五味の所従の本迹

てんだい　でんぎよう　ごみ　おうじゆ　しよじゆう　ごみ　ほん
天台・伝教の五味は横豎ともに所従なり。五味は本、

しゆぎよう　ひと　しゃく　ざいせ　うんぬん
修行の人は迹なり。在世、もつてかくのごとし云々。

だつしやく ふし ほんじやく

脱迹の父子の本迹

おうぶつ ほん しやくぶつ しやく こ ちち ほう ひろ

応仏は本、迹仏は迹なり。「子、父の法を弘むるに

せかい やく うんぬん

世界の益あり」云々。

だつしやく してい ほんじやく

脱迹の師弟の本迹

ぎりとも かみ おな わ でし まさ わ ほう ひろ

義理共に上に同じ。「これ我が弟子、応に我が法を弘

うんぬん

むべし」云々。

だつちやく かんとう ほんじやく

脱益の感応の本迹

くおん てんげつ かげ ちゅうげん こんにち だつちやく みず うつ

久遠の天月の影を中間・今日の脱益の水に移すな

しゅじよう くおん ほとけ ぜんぎよう こうむ

り。「衆生は久遠に仏の善巧を蒙る」とは、これなり。

だつちやく じゃくしょう ほんじやく

脱益の寂照の本迹

り うえ じゃくしょう みようかくないしかんぎようとう げりよう

理の上の寂照は妙覚乃至觀行等の解了なり。

りそく ほんぷ むたいいうゆう ほんじやく

理即の凡夫は無体有用の本迹なり。

だつちやく ずいえんふへん ほんじやく

脱益の随縁不変の本迹

ざいせ ぞうほう おな しんによ ぎり ずいえん ふへん

在世と像法とこれ同じ。真如の義理なり。随縁も不変

とも り いちだん ほんじやく

も、共に理の一段の本迹なり。

だつちやく くほうみよう ほんじやく

脱益の九法妙の本迹

さんほうみよう おのおのさんほうみよう ぐ くほうみよう

三法妙に各三法妙を具すれば九法妙なり。法中

しんほうみよう お しよう ぶつ にみよう ほんじやく

の心法妙より起こるところの生・仏の二妙なり。本迹は

知るべし。

だつちやく はつそうはつくしゅうごう ほんじやく

脱益の八相八苦習合の本迹

はつそう ほん はつく しやく

八相は本、八苦は迹なり。

どうたい ごんじつ

同体の権実これなり。

だつちやく かんじようとう ほんじやく

脱益の灌頂等の本迹

かんじよう しごく

灌頂とは至極なり。

のち よ ぶつぼさつ

かんじよう

後の世の仏菩薩の灌頂は

ほけきよう

しやくもん

かんじよう

ほうべん どんくじゆ

よくりよう しゆじよう

法華経なり。迹門の灌頂は方便読誦、「欲令衆生

かいぶつちけん しゆじよう

ぶつちけん ひら

ほつ

開仏知見（衆生をして仏知見を開かしめんと欲す）なり。

ほんもん

かんじよう

じゆりようほんどんくじゆ

ねんがじつじようぶついらい

本門の灌頂は寿量品読誦、「然我実成仏已来（しかるに、

われ

まこと じようぶつ

このかた

我は実に成仏してより已来）」なり。

だつちやく　せつしよかいだん　ほんじやく
脱益の説所戒壇の本迹

じかい　りかい
事戒　理戒

りようぜん　ほん　てんだいさん　しやく　くおん　まつぼう　じぎよう
靈山は本、天台山は迹なり。久遠と末法とは事行の
かい　じかい　りかい　こんち　ぞうほう　り　かいたい
戒〈事戒・理戒〉今日と像法とは理の戒体なり。

だつちやく　さんぜさんぶつ　り　ほんじやく
脱益の三世三仏の利の本迹

せぜ　ばんばん　きようしゆ　ほん　しよけ　しゆじよう　しやく　せぜ
世々番々の教主は本、所化の衆生は迹なり。世々

このかた　わ　け　う　ばんばん　しゆつせ　し　し　しょう
已来常に我が化を受け、番々に出世し、師とともに生ず。

だつちやく　しやうみやうたほうぶつとう　ほんじやく
脱益の証明多宝仏塔の本迹

みやうほうれんげきやう　みな　しんじつ　ほん　たほうぶつ
「妙法蓮華経は、皆これ真実なり」は本、多宝仏は

しやく

しやくもんはつぽんないしほんもん

さ

うんぬん

迹なり。迹門八品乃至本門、これを指すなり云々。

だつちやく

じよ

しやう

るつう

げんもん

ほんじやく

脱益の序・正・流通の現文の本迹

きやうもん

しやくぎ

り

うえ

しやうしゆう

るつう

じよ

経文・釈義のごとく、理の上の正宗・流通・序の

もん

ほん

すぐ

しやく

おと

しやく

ほんむ

文なれども、本は勝れ、迹は劣るなり。しかるに、迹は本無

こんぬ

くおん

しやく

だつ

こんにち

ほん

と

うんぬん

今有なれば、久遠の迹を脱として今日の本を説くなり云々。

だちやく

しやうじゆしやくぶく

ほんじやく

脱益の摂受折伏の本迹

てんだい

しやうじゆ

ほん

しやくぶく

しやく

ゆえ

天台は摂受を本とし折伏を迹とす。その故は、

ぞうほう

ざいせ

じゆくやくみやうり

ゆえ

ふくちぐそく

ゆえ

い

像法は在世の熟益冥利の故なり。「福智具足の故」と云え

り。

だつちやく にみよう ほんじやく

脱益の二妙の本迹

そうだいみよう しゃく ぜつだいみよう ほん

みようほう ほか

相待妙は迹、絶待妙は本なり。「妙法の外、さら

いっく よきよう な うんぬん どくいちほうかい ゆえ ぜつだい な

に一句の余経すら無し」云々。「独一法界の故に、絶待と名

しゃく おも

づく」の釈これを思うべし。

だつちやく じゆうみよう ほんじやく

脱益の十妙の本迹

ほんがみよう ほん くみよう しゃく

ざいせ てんだい

き

本果妙は本、九妙は迹なり。在世と天台とは、機の

うえ り ほとけ ほんいんみよう ほん

しよけ ほんがみよう ほん

上の理なり。仏は本因妙を本となし、所化は本果妙を本と

おも

思えり。

だつちやく ろくじゆう しょせつ ほんじやく

脱益の六重の所説の本迹

いこん ほん

よ しゃく

ほんじやくこと

已今を本となし、余は迹なり。「本迹殊なりといえ

ふしぎいち

うんぬん

りぐ

ほんじやく

いちぶ

ども、不思議一なり」云々。理具の本迹なれば、一部とも

しゃく

うえ

ほんじやく

に迹の上の本迹なり。

だつちやく

ろくそくしよはん

ほんじやく

脱益の六即所判の本迹

みようかく

ほん

よ

しゃく

妙覚は本、余は迹なり。

げん

く

い

はじ

じゅうじゅう

いん

じゅうぎよう

玄の九に云わく「初めの十住を因となし、十行

か

じゅうぎよう

いん

じゅうえこう

か

じゅうえこう

を果となす。十行を因となし、十回向を果となす。十回向

いん

じゅうじ

か

じゅうじ

いん

とうがく

か

を因となし、十地を果となす。十地を因となし、等覚を果と

とうがく

いん

みようかく

か

うんぬん

なす。等覚を因となし、妙覚を果となす」云々。

だつちやく　じつぷにもん　ほんじやく

脱益の十不二門の本迹

り　うえ　ふへん　ふに

理の上の不変の不二にして、
事行の不二門にはあら

ざるなり。

だつちやく　じつかいごぐ　ほんじやく

脱益の十界互具の本迹

りぐ　じつかいごぐ

じぎよう　ごぐ

理具の十界互具にして、
事行の互具にはあらざるな

くかい　り　ぶっかい　り　おい　かた

り。
九界の理を仏界の理に押し入る方ならでは脱せざる

なり。

だつちやく　じゆうにいんねんしたい　ほんじやく

脱益の十二因縁四諦の本迹

きよう　い　むみょうないしろうし　うんぬん　く　じゆう　めつ　しゃく

経に云わく「無明乃至老死」云々。苦・集・滅は迹

なり、道諦は本なり。
どうたい ほん

だつちやく さんど ほんじやく

脱益の三土の本迹

報土は本、同居・方便は迹なり。
ほうど ほん どうご ほうべん しゃく

妙楽云わく「脱は現に在りといえども」。
みょうらくい だつ げん あ
へ本迹は

理の上の一致なり。心は、寿量品も文は現量なれども、
り うえ いっち こころ じゆりようほん もん げんりよう

上行所伝の本因妙を唱え顕して後は、ただ久遠の教相
じようぎようしよでん ほんいんみよう とな あらわ のち くおん きようそう

にて成仏の肝要の觀心にはあらずと云々。
じようぶつ かんよう かんじん うんぬん

籤の一に云わく「本の中の体等は迹と殊ならず」。
せん いち い ほん なか たいとう しゃく こと

へ脱益の妙覚乃至觀行・相似等の妙法蓮華経は、理に即
だつちやく みようかくないしかんぎよう そうじとう みようほうれんげきよう り そく

して事じを含ふくむ。しかれども本迹一致にあらず。破は廢はいして本ほんを立たつ云々うんぬん。

玄げんの七しちに云いわく「權実ごんじつは智ちに約やくし教きように約やくす」。へ化けたふじようときほどこ他不定の時施すところの權実八教なり。へりようしよこと兩所殊ならず。へ久遠の本と今日の脱益との兩所なり。へくおん ほん こんにち だつちやく りようしよ

籤せんの七しちに云いわく「理りに淺深無し。故ゆえに『殊ことならず』と曰いう。へ本因本果の理を、今日・中間にも寿量顯本の理ほんいんほんが り こんにち ちゆうげん じゆりようけんぽん りに推おし入いれて顯あらわすと釈しゃくするなり。へお い

籤せんの七しちに云いわく「經きように約やくすれば、これ本門ほんもんなりと

すで

こんぜしやくちゆう

ほん

な

ほんもん

いえども、既にこれ今世迹 中の本を名づけて本門となす。

ゆえ

し

こんにち

まさ

しやくちゆう

りやく

あ

故に知んぬ、今日は正しく迹 中の利益に当たること。

ないしほんじよういご

ちゆうげん

な

ちゆうげん

ほん

あらわ

乃至本成已後、ともに中間と名づく。中間に本を顕す

りやく え

しやく

やく

じよう

こんにち

に利益を得れば、なお迹の益を成ず。いわんや、また今日

もん

こころ

くおんほんが

しやく

ちゆうげん

こんにち

ほん

をや」文。へ意は久遠本果の迹を中間・今日の本となす。

くおんみようじ

みようほう

かげ

ちゆうげん

こんにち

すいじやく

ゆえ

また久遠名字の妙法の影を中間・今日に垂迹する故に、

げしゆ

たい

だつちやくじゆりよう

しやく

え

しようこ

しやく

下種に対して脱益寿量を迹と得たる証拠に釈する、こ

れなり。

しよ

いち

い

しゆじよう

くおん

ほとけ

ぜんぎよう

こうむ

疏の一に云わく「衆生は久遠に仏の善巧を蒙

る」。くおん げしゅ りようざん とくだつ
「久遠の下種、靈山の得脱」。

籤の十に云わく「故に知んぬ、今日の逗会は昔の
せん じゅう い ゆえ し こんちち ずえ むかし

成熟の機に赴くことを」。き おもむ りようぜん げしゅ くおん とくだつ
じようじゅく
成熟の機に赴くことを」。へ靈山の下種、久遠の得脱の

益」。やく

記の二に云わく「本時の自行はただ円のみと合す」。き に い ほんじ じぎよう えん がつ

「本時とは本因妙の時なり」。ほんじ ほんいんみよう ととき けた ふじよう はつきよう
あ
「本時とは本因妙の時なり」。ちゆうげん こんちち けどう ぎしき

「有り」。げん しち い しゃく ほん ほん こんちち
「中間・今日の化導の儀式なり」

玄の七に云わく「迹の本は本にあらず」。げん しち い しゃく ほん ほん こんちち
「今日の

本果妙のことなり」。ほんがみよう ほん しやく しゃく ほんいんみよう
「本の迹は迹にあらず」。へ本因妙の

ほんじやくこと

ふしぎいち

ことなり。」「本迹殊なりといえども、不思議一なり」。

ほんいんみよう

ほか

まった

しやくな

しやくもん

すなわ

けんぽん

〈本因妙の外、全く迹無きなり。迹門は、即ち顕本の

のち

ほんむこんぬ

ほうべん

むとくどう

なかじま

しょうしゆん

後は本無今有の方便にして無得道なり。中島の証俊、「い

と

とき

しゆんぱんほういんこた

い

ふしぎいち

かん」と問いし時、俊範法印答えて云わく「不思議一なり」。

もと

い

ぎ

こた

い

もん

しやくもん

求めて云わく「その義、いかん」。答えて云わく「文は迹門

あ

ぎ

ほんもん

あ

うんぬん

え

い

しやくもんすで

に在るも、義は本門に在り」云々。会して云わく「迹門既

やくな

ほんもん

やくあ

ほんじやくしょうれつ

ふしぎいち

うんぬん

に益無し。本門は益有り。本迹勝劣、不思議一なり」云々。〓

みようらくい

ごんじつ

り

ほんじやく

じ

てんだい

妙楽云わく「権実は理なり。本迹は事なり」。天台

い

ほんじやく

にきよう

い

によらい

ほんじやく

り

云わく「本迹を二経となす」と云えり。〓如来の本迹は理

うえ ほつそう にちれん ほんじやく じぎよう ほつそう
の上の法相なり。日蓮の本迹は事行の法相なり。

いじよう だつ うえ ほんじやくしようれつ くけつ お
以上、脱の上の本迹勝劣の口決畢わんぬ。

じ いちねんさんぜんいつしんさんがん ほんじやく
事の一念三千一心三観の本迹

しやか さんぜ しょうぶつ しょうもん えんがく にん てん とな かた
釈迦・三世の諸仏・声聞・縁覚・人・天の唱うる方は

しやく なんみようほうれんげきよう ほん
迹なり。南無妙法蓮華経は本なり。

くおんがんじよ じぎきよう ほんじやく
久遠元初の直行の本迹

みようじ ほんいんみよう ほんしゆ ほんもん ほんがみよう よぎよう
名字の本因妙は本種なれば本門なり。本果妙は余行

わた ゆえ ほん うえ しゃく くおん しゃくそん くしやう いま
に渡る故に、本の上の迹なり。久遠の釈尊の口唱を、今、

にちれんただ

とな

日蓮直ちに唱うるなり。

くおんじつじよう　じきたい　ほんじやく

久遠実成の直体の本迹

くおんみようじ　しょうほう　ほんしゆし

みようじどうぎよう　くらい

久遠名字の正法は本種子なり。名字童形の位の

しゃか　しゃく　われ　もとぼさつ　どう　ぎよう

にちれん

釈迦は迹なり。「我は本菩薩の道を行ず」これなり。日蓮

しゆぎよう　くおん　うつ

が修行は久遠を移せり。

くおんほんがじようどう　ほんじやく

久遠本果成道の本迹

みようじ　みようほう　たも

じきたい　ほんもん

ただ

名字の妙法を持つところは直体の本門なり。直ちに

とな　たてまつ　われ　しゃく

唱え奉る我らは迹なり。

くおん　じじゆゆうほうしん　ほんじやく

久遠の自受用報身の本迹

男は本、女は迹、知り難き勝劣なり。

能く能く伝流口決すべきものなり。

久成本門為事円の本迹

上行所伝の妙法は、名字本有の妙法蓮華経なれ

ば、事理俱勝の本なり。日蓮ならびに弟子檀那等は迹なり。

色法即身成仏の本迹

親の義なり、父の義なり。涌出品より已後、我らは

色法の成仏なり。余行に渡らざる妙法は本、我らは迹な

り。

しきほうみようほうれんげきよう ほんじやく

色法妙法蓮華經の本迹

なんし な みようじ だいほう き ここ もつもつ じじ

男子と成つて名字の大法を聞き、己々・物々・事々に

ほんじやく あらわ こんにち にじゅうはつぽん ほんぽん うち

本迹を顕すものなり。また今日の二十八品、品々の内の

しょうれつ つうごう ほん しょう べつごう しゃく れつ うんぬん

勝劣は、通号は本なり勝なり、別号は迹なり劣なり云々。

みようらく しょうき く い ゆえ し しゃく じつ

妙楽、疏記の九に云わく「故に知んぬ、迹の実は

ほん こ せん じゅう い こんにち

本においてなお虚なることを」。籤の十に云わく「今日は

しょうじょう がんし にぜん しゃくもん だいつう

初成をもつて元始となし〈爾前〉、迹門は大通をもつて

がんし しゃくもん ほんもん ほんいん がんし

元始となし〈迹門〉、本門は本因をもつて元始となす

ほんもん

〈本門〉」。

しやく　　がんし　　ほんじやく　　おんごん　　しょうれつ　　ほん
この釈は、元始の本迹・遠近の勝劣を判ずるな

ほんがみよう

われ　じつ　じようぶつ

このかた

り。本果妙は「しかるに、我は実に成仏してより已来」、

しやくもん

しやく　　ほん　　ほん

ほんいんみよう

なお迹門なり。「迹の本は本にあらず」なり。本因妙は

われ　もとぼさつ

どう　　ぎよう

しんじつ　　ほんもん

ほん　　しやく

「我は本菩薩の道を行ず」、真実の本門なり。「本の迹は

しやく

うんぬん

わ

ないしよう

じゆりようほん

しやつけ

し

迹にあらず」云々。我が内証の寿量品は迹化も知らず

うんぬん　じゆういひぞう

ぎ

ほんじやく

ふんべつ

うえ

しょうれつ

じじよう

云々。重位秘蔵の義なり。本迹と分別する上は勝劣は治定

まつだい

し

がた

ゆえ

うんぬん

なれども、末代には知り難きが故に云々。

くおんじゆうかこういん

ほんじやく

久遠従果向因の本迹

ほんがみよう

しやかぶつ

ほんいんみよう

じようぎようぼさつ

くおん

本果妙は釈迦仏、本因妙は上行菩薩なり。久遠の

みようほう か こんにち じゆりようほん け ゆえ じゆうかこういん
妙法は果、今日の寿量品は花なるが故に、従果向因の

ほんじやく い
本迹と云うなり。

ほんいん みようほうれんげきよう ほんじやく
本因の妙法蓮華經の本迹

まつた よぎよう わ みようほう ほん とな にちれん
全く余行に分かたざりし妙法は本、唱うる日蓮は

しゃく てほん ふきようぼさつ にじゅうしじ
迹なり。手本には不輕菩薩の二十四字これなり。またその

ぎようぎ うんぬん
行儀これなり云々。

よぎよう わた ほけきよう ほんじやく
余行に渡らざる法華經の本迹

ぎりかみ おな じきだつ ほつけ ほんもん とな しゃか しゃく
義理上に同じ。直達の法華は本門、唱うる釈迦は迹

いま にちれん しゆぎよう くおんみようじ ふ ま けに
なり。今、日蓮が修行は久遠名字の振る舞いに介爾ばかり

たが
も違わざるなり。

げしゅ ほけきょう きょうしゅ ほんじゃく

下種の法華經の教主の本迹

じじゅゆうしん ほん じょうぎようにちれん しゃく

自受用身は本、上行日蓮は迹なり。我が内証の

じゅりようほん

だつちやくじゅりよう もんてい ほんいんみよう

寿量品とは、脱益寿量の文底の本因妙のことなり。そ

きょうしゅ それがし

の教主は某なり。

げしゅ こんしさんがい しゅ ほんじゃく

下種の今此三界の主の本迹

くおんがんし てんじょうてんげゆいがどくそん にちれん

久遠元始の「天上天下唯我独尊」は日蓮これなり。

くおん ほん こんにち しゃく さんぜじょうじゅう にちれん みようじ りしろう

久遠は本、今日は迹なり。三世常住の日蓮は名字の利生

なり。

げしゆ　とくほうかんじん　ほんじやく
下種の得法觀心の本迹

くおんげしゆ　とくほう　ほん　こんにち　ちゅうげんとう　とくほう　かん
久遠下種の得法は本なり。今日・中間等の得法・觀

じん　しゃく　ふんべつくだくほん　みようじ　しよずいき　もん　うんぬん
心は迹なり。分別功德品の名字の初随喜の文のごとし云々。

げしゆ　じげぶつじよう　ほんじやく

下種の自解仏乗の本迹

みようじ　みようほう　じようぎようしよでん　き　う　かた

名字の妙法を上行所伝と聞き得る方は、自解

ぶつじよう　ほん　き　え　のち　じゆじ　われ　しゃく　ゆえ

仏乗の本なり。聞き得て後、受持する我らは迹なり。故に

でんぎよう　にちれん　すぐ　うんぬん

伝教より日蓮は勝るるなり云々。

まつぼう　じこく　ぐつう　ほんじやく

末法の時刻の弘通の本迹

ほんいんみよう　ほん　こんにちじゆりよう　だつちやく　しゃく

本因妙を本とし、今日寿量の脱益を迹とするな

くおん　しゃくそん　しゅぎよう　いまにちれん　しゅぎよう

けに

り。久遠の釈尊の修行と今日蓮の修行とは、介爾ばかり

たが

しょうれつ

うんぬん

も違わざる勝劣なり云々。

ほんもん

しゅぎよう

ほんじやく

本門の修行の本迹

しょうどうにせんねん

しゅぎよう

しゃくもん

まつぼう

しゅぎよう

正像二千年の修行は迹門なり、末法の修行は

ほんもん

ちゅうげん

こんち

ほとけ

しゅぎよう

にちれん

しゅぎよう

本門なり。また中間・今日の仏の修行より日蓮の修行は

すぐ

勝るものなり。

ほんもん

ごだいそん

ほんじやく

本門の五大尊の本迹

くおんほんが

じじゅゆうほうしんによらい

ほん

じょうぎようとう

し

久遠本果の自受用報身如来は本なり、上行等の四

ぼさつ

しゃく

菩薩は迹なり。

にちれん ほんもんぐつう ほんじやく
日蓮の本門弘通の本迹

ほんいんみよう ほん われ もとぼさつ どう ぎよう しゃく
本因妙は本なり、「我は本菩薩の道を行ず」は迹な

うんぬん
り云々。

ほんげ じぎよういつち ほんじやく
本化の事行一致の本迹

ほんじやくこと ふしぎいち うんぬん
「本迹殊なりといえども、不思議一なり」云々。

ほんいんみよう ほか しゃく べつ な ゆえ いち
本因妙の外にならびに迹とて別してこれ無し。故に一と

しゃく しんじつ しょうれつ てほん ぎ うんぬん
釈するものなり。真実の勝劣の手本の義なり云々。

のち じゆうしほんみなるつう ほんじやく
後の十四品皆流通の本迹

ほんがみよう しゃくそん ほんいんみよう じようぎようぼさつ め い
本果妙の釈尊、本因妙の上行菩薩を召し出だす

いっこう めつごまつぽうりやく

ことは、一向に滅後末法利益のためなり。しかるあいだ、

にちれん しゅぎよう とき のち じゅうしほん みなめつご るつうぶん

日蓮の修行の時は、後の十四品は皆滅後の流通分なり。

げしゅ かいだい ほんじやく

下種の戒体の本迹

にぜん しゃくもん かいだい ごんじつぞうらん ほんもん かいだい じゅんいち

爾前・迹門の戒体は権実雜乱、本門の戒体は純一

むぞう だいかい

無雜の大戒なり。

しょうれつ てんち すいか およ かいだいしよう

勝劣は天地・水火なお及ばず。つぶさには戒体抄

うんぬん

のごとし云々。

ほんげ しちめん ほんじやく

本化の七面の本迹

まつぽう じぎよう ほん ざいせ ぞうほう りかん ほん

末法には事行を本とし、在世と像法とには理觀を本

とすなり。天台の本書は、理の上の事なれば、一向に迹門てんだい ほんしよ り うえ じの七決、我が家の本書は事の上の本なり。しちけつ わ け ほんしよ じ うえ ほん

下種の三種の法華の本迹げしゆ さんしゆ ほつけ ほんじやく

二種は迹なり、一種は本なり。迹門は隱密法華、にしゆ しゃく いっしゆ ほん しゃくもん おんみつほつけ

本門は根本法華、迹本の文底の南無妙法蓮華經は顯說法華ほんもん こんぽんほつけ しゃくほん もんてい なんみようほうれんげきよう けんぜつほつけなり。

本化の本尊の本迹ほんげ ほんぞん ほんじやく

七字は本なり、余の十界は迹なり。諸經・しちじ ほん よ じっかい しゃく しよきよう

諸宗中王の本尊、万物下種の種子無上の大曼荼羅なり。しよしゆうちゆうおう ほんぞん ばんぶつげしゆ しゆしむじよう だいまんだら

げしゆ しゆごしん ほんじやく
下種の守護神の本迹

しゆご たてまつ

だいもく ほん まも

しんめい

守護し奉るところの題目は本、護るところの神明

しやく

しよぶつくせしや

むりよう

じんりき

げん

うんぬん

は迹なり。「諸仏救世者は、無量の神力を現じたもう」云々。

げしゆ さんのうしん ほんじやく

下種の山王神の本迹

くおん う

みようほう

ほん

ちゆうげん

こんにち

みらい

久遠に受くるところの妙法は本、中間・今日・未来

まも きた

さんのうみようじん

すなわ

しやく

までも守り来るところの山王明神は即ち迹なり。

げしゆ じゆうらせつによ ほんじやく

下種の十羅刹女の本迹

ぎり かみ おな

しんめい

じゆうによ

ほんじやく

この義理、上に同じ。ただ、神明と十女とを本迹に

たい とき じゆうらせつによ ほん しんめい しやく

対する時、十羅刹女は本、神明は迹なり。

ほんもん ふぞく ほんじやく

本門の付嘱の本迹

くおん みようじ とき

う

みようほう

ほん

じようぎようとう

久遠名字の時、受くるところの妙法は本、上行等

しゃく

は迹なり。

久遠元初の結要付嘱は、日蓮の今日寿量の

ふぞく どうい

うんぬん

付嘱と同意なり云々。

ほんもん

かいえ

ほんじやく

本門の開会の本迹

くおん

ほんえ

ほん

こんにちじゆりよう

だつ

しゃく

久遠の本会を本となし、今日寿量の脱を迹とする

なり。

みようらくい

はじ

あらわ

かい

い

お

がつ

妙楽云わく「始めに顕すを開と云い、終わりに合

え

い

もん

するを会と云う」文。

げしゆ　じようぶつ　ほんじやく
下種の成仏の本迹

ほんいんみよう　ほん　じじゆゆうしん　しやく　じようぶつ　かた
本因妙は本、自受用身は迹なり。成仏は難きにあ

きよう　たも　かた　うんぬん
らず。この経を持つこと難ければなり云々。

げしゆ　さんしゆ　きようそう　ほんじやく
下種の三種の教相の本迹

にしゆ　しやくもん　いっしゆ　ほんもん　きようそう　きようそう
二種は迹門、一種は本門なり。本門の教相は教相

しゆくん　にしゆ　にじゆうはつぽん　いっしゆ　だいもく　かんじん
の主君なり。二種は二十八品、一種は題目なり。題目は観心

うえ　きようそう
の上の教相なり。

ごみ　しゆ　なか　しゆ　ほんじやく
五味の主の中の主の本迹

にちれん　ごみ　おうじゆとも　ごみ　しゆ　しゆぎよう　ごみ
日蓮が五味は横豎共に五味の主の修行なり。五味は

すなわ ほんもん しゅぎよう すなわ しゃくもん
即ち本門、修行は即ち迹門なり。

ほんしゅ していふへん ほんじやく
本種の師弟不変の本迹

くおんじつじよう じじゅゆうしん ほん じようぎようぼさつ しゃく
久遠実成の自受用身は本、上行菩薩は迹なり。

さんぜじようごうふへん やくそく
三世常恒不変の約束なり。

ほんしゅ ふ しじようじゅう ほんじやく
本種の父子常住の本迹

ぎり かみ おな くおん みようじそく ぞくたいじようじゅう ふし
義理、上に同じ。久遠の名字即の俗諦常住の父子は、

いま にちれん しゅぎよう こと せけん そう じようじゅう
今、日蓮が修行に殊ならず。「世間の相は常住なり」こ

れなり。

しどぐそく ほんじやく
四土具足の本迹

さんど しやく じようじやつこうど ほん しどそくじようじやつこう

三土は迹、常寂光土は本なり。四土即常寂光・

じやつこうそくしど じようど ほんもんぐきよう どうじよう

寂光即四土の浄土は、ただ本門弘経の道場なり。

げしゆ かのうにちがつ ほんじやく

下種の感応日月の本迹

げしゆ ほとけ てんげつ だつ ほとけ ちげつ

下種の仏は天月、脱の仏は池月なり。

てんだい い てんげつ し ちげつ

天台云わく「天月を識らず、ただ池月のみを観ず」

うんぬん かん

云々。

げしゆ ずいえんふへん ほんじやく

下種の随縁不変の本迹

たいゆうどうじ しんじつしんによ ひとくち しゆだい ほんぬ しやく

体用同時の真実真如、一口の首題なり、本有の迹、

ほんぬ いちねんさんぜん ずいえん ふへん いちねん じやく しょう

本有の一念三千これなり。「随縁・不変は、一念の寂・照

ほんじゃく

なり」の本迹なり。

げしゅ くほうみよう ほんじゃく

下種の九法妙の本迹

くおんげしゅ みようほう ほん このかた くほう しゃく

久遠下種の妙法は本、已来の九法は迹なり。

げしゅ にんてん ほんじゃく

下種の人天の本迹

くおんげしゅ みようほう ほん このかた にんてん しゃく

久遠下種の妙法は本なり、已来の人天は迹なり。

げしゅ はつそうはつくしゅうごうじつしよう ほんじゃく

下種の八相八苦習合実勝の本迹

だつ はつそう しゃく しゅ はつそう ほん だつ はつく しゃく

脱の八相は迹、種の八相は本なり。脱の八苦は迹、

しゅ はつく ほん ぼんのうそくぼだい しょうじそくねはん じょうざいしふめつ

種の八苦は本なり。煩惱即菩提、生死即涅槃、常在此不滅

い

と云えり。

げしゆ　さいご　じきじゆまちよう　ほんじやく
下種の最後の直授摩頂の本迹

くおんいちねんがんじよ　みようほう　う　いただ　さいごくむじよう
久遠一念元初の妙法を受け頂くことは、最極無上

かんじよう　ほう　ほん　にん　しゃく
の灌頂なり。法は本、人は迹なり。

げしゆ　ぐつうかいだんじつしよう　ほんじやく
下種の弘通戒壇実勝の本迹

さんか　ひほうこんりゆう　しやうち　ふ　じさんほんもんじ　ほんどう
三箇の秘法建立の勝地は、富士山本門寺の本堂なり。

じようぎよういん　そしどううんぬん　ぐつうしよ　そう　いんごう
（上行院は祖師堂云々。弘通所は総じて院号な

うんぬん
るべし云々）

げしゆ　じやくしやうじつじたいゆうむじよう　ほんじやく
下種の寂照実事体用無上の本迹

しやうぶついちによ　じ　うえ　ほんがく　じやくしやう　にん　しゃく
生仏一如の事の上の本覚の寂照なり。人は迹、

ほとけ ほん うんぬん

仏は本なり云々。

げしゅ さんぜさんぶつ じつやく ほんじやく

下種の三世三仏の実益の本迹

にちれん げしゅ りやく さんぜくせ しゅ じゆく だつ ほんぬいちねん

日蓮は下種の利益、三世九世の種・熟・脱の本有一念

りやく てんだいい は りゆう みな ほつけ

の利益なり。天台云わく「もしは破、もしは立、皆これ法華

ごころ しゅぎよう りやく

の意なり」の修行の利益なり。

げしゅ しようみようたほうぶつとう ほんじやく

下種の証明多宝仏塔の本迹

くおんじつじよう む しむしゆう ほんぼう みようほうれんげきよう みな

久遠実成・無始無終・本法の「妙法蓮華経は、皆こ

しんじつ ほん くおん ほんし みようほう ほんぬじつじよう

れ真実なり」は本なり。久遠の本師は妙法なり。本有実成

しやか たほう しゃく

の釈迦・多宝は迹なり。

げしゆ　じよ　しよう　るつう　もんてい　ほんじやく
下種の序・正・流通の文底の本迹

おうぶつ　てんだい　しょうしゅういつぽんにはん　ほんもん　さだ　げんもん
応仏と天台とは正宗一品二半を本門と定む、現文

しょうれつ　ほうぶつ　にちれん　るつう　ほん　さだ　もんてい　しょうれつ
の勝劣なり。報仏と日蓮とは流通を本と定む、文底の勝劣
なり。

げしゆ　しょうしやくにもん　ほんじやく
下種の掇折二門の本迹

にちれん　しやくぶつ　ほん　しょうじゆ　しやく　さだ　ほつけ
日蓮は折伏を本とし、掇受を迹と定む。「法華の

しやくぶく　ごんもん　り　は
折伏は権門の理を破す」とは、これなり。

げしゆ　にみようじつこう　ほんじやく
下種の二妙実行の本迹

にちれん　だつ　にみよう　しやく　しゆ　にみよう　ほん　さだ
日蓮は脱の二妙を迹となし、種の二妙を本と定む。

しかして、相待は迹、絶待は本なり云々。
そうだい　しゃく　ぜつだい　ほん　うんぬん

下種の十妙実体の本迹
げしゅ　じゅうみやうじつたい　ほんじやく

日蓮は本因妙を本となし、余を迹となすなり。
にちれん　ほんいんみよう　ほん　よ　しゃく

れ真実の本因本果の法門なり。
しんじつ　ほんいんほんが　ほうもん

下種の六重の具騰の本迹
げしゅ　ろくじゅう　ぐとう　ほんじやく

日蓮は脱の六重を迹となし、種の六重を本とする
にちれん　だつ　ろくじゅう　しゃく　しゅ　ろくじゅう　ほん

なり云々。
うんぬん

下種の六即実勝の本迹
げしゅ　ろくそくじつしょう　ほんじやく

日蓮は脱の六即を迹となし、種の三世一即の六即、
にちれん　だつ　ろくそく　しゃく　しゅ　さんぜいつそく　ろくそく

あんい りそく かいえ みようかく かいえ りそく ほんがく ごくか ほん
案位の理即は開会の妙覚、開会の理即は本覚の極果を本と
するなり。

げしゆ じゆうにいんねん ほんじやく
下種の十二因縁の本迹

にちれん おうぶつしよせつ じゆうにいんねん しゃく くおんほうぶつ
日蓮は応仏所説の十二因縁を迹となし、久遠報仏

しよせつ じゆうにいんねん ほん さだ
所説の十二因縁を本と定むるなり。

げしゆ じつぷにもん ほんじやく
下種の十不二門の本迹

にちれん じつぷにもん じ うえ ごくごく じり いちたいゆう
日蓮が十不二門は、事の上の極々の事理一体用の

ふにもん
不二門なり。

げしゆ じっかいごく ほんじやく
下種の十界互具の本迹

とな たてまつ みようほうぶつ かい ほん とな われ ぐかい しゃく
唱え奉る妙法仏界は本、唱うる我ら九界は迹な

みようかく りそく ほんぷ まこと じっかいごぐ しょうれつ
り。妙覚より理即の凡夫までなり。実の十界互具の勝劣

とは、これなり。

げしゆ きようち くじつ ほんじやく
下種の境智俱実の本迹

だつ きようち しゃく しゆ きようち ほん みようじそく きようち
脱の境智は迹、種の境智は本なり。名字即の境智は

きようち ほん かんぎようそく きようち きようち しゃく うんぬん
境智ともに本、観行即の境智は境智ともに迹なり云々。

こころ じっかい ぶつしょう ひとくち よ あらわ ほんいん
意は十界の仏性ただ一口に呼び顯すなり。本因

くしょう すぐ なんみようほうれんげきよう しょうしんじようぶつしょう
口唱の勝るる南無妙法蓮華經なり。初心成仏抄のごとき

なり。弘の一に云わく「理は造作にあらざるが故に『天真』
とい、証智は円明なるが故に『独朗』と云う」云々。へ久遠
の理と今日の理と、理に造作無し。しかれども、久遠は事の
上の理なり、今日は理の上の理なり。故に知んぬ、本因妙
の理は勝れ、今日の本果妙の理は劣るなり。これ理の本迹
なり。この故に独朗と云うなり。また云わく「独一法界の故
に、絶待と名づく」云々。

天台は「ただ大綱のみを存して綱目を事とせず」

と。へこの釈の意は、大綱は本、綱目は迹なり。天台・

でんぎよう しゆぎよう もうもく にちれん につこうとう しゆぎよう たいこう うんぬん
伝教の修行は綱目、日蓮・日興等の修行は大綱なり云々。

によらい ひみつ じんずう ちから こころう
「如来の秘密・神通の力」意得べし。へこれ事・

り によらい ほんじゃく ひみつ によらい りしよう によらい われ
理の如来の本迹なり。秘密の如来は理性の如来なり、我ら

じんずう によらい せそん ひみつ ほんじ じんずう すいじゃく
なり。神通の如来は世尊なり。秘密は本地、神通は垂迹な

せぜ このかた つね わ け う われ もとぼさつ どう
り。「世々より已来、常に我が化を受く」「我は本菩薩の道を

ぎよう じよう じゆみよう いま
行じて、成ぜしところの寿命は、今なおいまだ尽きず、

かみ かず ばい うんぬん
また上の数に倍せり」云々。

ほんじゃく しょうれつ り じん のん ほとけ と
本迹の勝劣、その理は甚遠なり。仏もし説かず

みろく くら したじ
んば、弥勒なお暗し。いかにいわんや下地をや。いかにい

わんや凡夫をや。本仏・本化いまし能く究尽したまえり云々。
ほんぷ ほんぶつ ほんげ よ くじん うんぬん

妙楽云わく「つぶさに本種を騰ぐ」。〈本は勝、迹
みようらくい ほんしゆ あ ほん しょう しゃく

は劣なり〉。故にただ名のみにおいて、もつて本迹を分か
れつ ゆえ な ほんじやく わ

つ」。〈下種の名字の妙法の事行の勝劣なるところを判ず
げしゆ みようじ みようほう じぎよう しょうれつ はん

るなり〉。

「本迹は身に約し位に約す」。〈久遠名字即の身と
ほんじやく み やく くらい やく くおんみようじそく み

位との判なり〉。「本より迹を垂れ、迹は本に依る」「迹
くらい はん ほん しゃく た しゃく ほん よ しゃく

は究竟にあらず」。玄の一に「開示悟入はこれ迹の要なり
くきよう げん いち かいじごにゆう しゃく よう

といえども、もし顕本し已わらば、即ち本の要と成るなり」。
けんぽん お すなわ ほん よう な

せん いち

しやくちゆう

じりないしごんじつな

なん よ

籤の一に「もし迹中の事理乃至権実無くんば、何ぞ能く

ちようじゆ

ほん

あらわ

うんぬん

長寿の本を顕さん」云々。

いじよう

しゆ

ほんじやくしようにれつ お

已上、種の本迹勝劣畢わんぬ。

みぎ

けつみやく

ほんじやくしようにれつ

かずいっぴやくろつか

右、この血脈は本迹勝劣、その数一百六箇これ

しる

すうりよう

ひようじあ

かくち

を注す。数量について表事有り。これを覚知すべし。

しやか

しよぶつ

しゆつせ

ほんかい

しんじつしんじつ

ゆい いちだいじ

釈迦・諸仏の出世の本懐、真実真実・唯為一大事の

ひみつ

まんねんくご

しる

とど

秘密なり。しかるあいだ、万年救護のためにこれを記し留む。

ろくにん

ゆいてい

さだ

ひようじ

さきさき

へなかんずく六人の遺弟を定むる表事は、先々に

きた

うんぬん

じきじゆけつちようふぞく

いちにん

沙汰するがごとし云々。ただし直授結要付嘱は一人なり。

びやくれんあじやりにつこう

そうかんず

にちれん しょうぎ

白蓮阿闍梨日興をもつて総貫首となして、日蓮が正義こと

もうとうほど

のこ

ふぞく

ごとくもつて毛頭程もこれを残さず、ことごとく付嘱せし

お

じようしゆいげ

まっていとう

いろんな

じんみらい

め畢わんぬ。上首已下ならびに末弟等、異論無く、尽未来

さい いた

よ そんじつ

につこうちやくちやくふほう

しょうにん

際に至るまで、予が存日のごとく、日興嫡々付法の上人

そうかんず

あお

をもつて総貫首と仰ぐべきものなり。

ごにん

いげ

しよそうとう

にほんないし

また五人ならびに已下の諸僧等、日本乃至

いちえんぶだい

ほか

ばんこく

るふ

につこう

一閻浮提の外、万国にこれを流布せしむといえども、日興

ちやくちやくそうじよう

まんだら

ほんどう

しょうほんぞん

嫡々相承の曼荼羅をもつて本堂の正本尊となすべきな

ゆえん

ざいせ めつごこと

ふぞく ぎしき

り。所以はいかん、在世・滅後殊なりといえども、付嘱の儀式

おな

たと

しだいろくまん

じきてい

ほんけんぞくあ

これ同じ。譬えば、四大六万の直弟の本眷属有りといえど

じようぎようさつた

けつちよう

だいどうし

さだ

も、上行薩埵をもつて結要の大導師と定むるがごとし。

いま

ろくにんいか

すうはい

でしあ

今もつてかくのごとし。六人以下、数輩の弟子有りといえ

につこう

けつちようふぞく

たいしよう

さだ

ども、日興をもつて結要付嘱の大將と定むるものなり。

こうちようはいる

ひ

ぶんえいるざい

とき

ほか

また弘長配流の日も、文永流罪の時も、その外

しよしよ

だいなん

おりふし

せんじん

にちれん

かげ

かたち

したが

諸処の大難の折節も、先陣をかけ、日蓮に影の形に随う

たれ

うたが

えんざんじとう

がごとくせしなり。誰かこれを疑わんや。また延山地頭

ほっしん

こんげん

につこうきようけ

りきゆう

とんせい

かいのくにみまき

発心の根元は日興教化の力用なり。遁世のこと、甲斐国御牧

は日興懇志の故なり。

ごほんぞんしよしや よ あらわ たてまつ

また御本尊書写のこと、予が願し奉るがごとく

にちれんごはん か てんじんちぎ もち

なるべし。もし日蓮御判と書かずんば、天神地祇もよも用い

たま じようぎよう むへんぎよう じこく じようぎよう あんりゆうぎよう びしやもん

給わじ。上行・無辺行と持国と浄行・安立行と毘沙門

あいだ にやくのうらんしやず は しちぶん のうらん もの こうべ

との間には「若悩乱者頭破七分（もし悩乱する者は頭

しちぶん わ うくようしやふくかじゆうごう くよう

七分に破れん）」「有供養者福過十号（供養することあらん

もの ふくじゆうごう す しよ きようちゆう

者は福十号に過ぐ）」「とこれを書すべきなり。経中の

みようもんとう こころ まか

明文等、意に任すべきか。

た なみ ふ かぜ ばんぶつ ほんじやく わ

また立つ浪、吹く風、万物について本迹を分け、

しょうれつ

わきま

勝劣を弁わぜべきなり。